

研究課題名	【演題番号 11】 新生児・乳児早期に発症する消化管アレルギーの病態解明
フリガナ	マツオカ リョウ
代表者名	松岡 諒
所属機関（機関名） （役職名）	国立成育医療研究センター研究所 免疫アレルギー・感染研究部 共同研究員
本助成金による 発表論文，学会発表	なし

研究結果要約

消化管アレルギーは、食物成分に対する免疫応答によって嘔吐や下痢等の消化器症状と体重増加不良などを呈する疾患でその多くは新生児期もしくは乳児期に発症する。一般的な食物アレルギーは食物抗原特異的 IgE 抗体を介した機序により症状が引き起こされるとされる一方で、消化管アレルギーは食物特異的 IgE 抗体が検出されないことが多いことから、IgE 抗体を介さない機序で誘導されていると考えられている。消化管アレルギーは、消化管粘膜内に好酸球浸潤を認めることも多いため、消化管局所に 2 型炎症が存在することが示唆されるが、その誘因・病態メカニズムはほとんど明らかにされていない。故に、詳細な発症メカニズムの理解と共に、それらに基づく有効な予防法/治療法の開発が望まれている。本研究では、母体が摂取する旨味成分に着目し、新生児/乳児期早期に発症する消化管アレルギーのメカニズムを解明することを目的とした。その結果、母体マウスに妊娠中から授乳期まで高濃度のコハク酸を投与すると、仔マウスにおいて体重増加不良を認めること、小腸組織のタフト細胞の増加、好酸球の増加が認められることが明らかとなった。妊娠中のみの投与では、仔マウスの体重増加不良を認めなかったことから、授乳中の摂取が関与している可能性を示唆している。また、小腸タフト細胞は消化管の成熟とともに増加する可能性が明らかとなった。